

# 大学生の文体混用についての一考察 —「仏教」レポートの分析—

高橋 美奈子

## 0. はじめに

本学の授業科目「仏教Ⅰ」「仏教Ⅱ」(1・2 Semester 生配当)においては、講話を受講生が聴き、それに基づくレポートを授業時間内に作成して提出するということが行われている。

筆者は平成 25 年度、担任しているクラスの学生のレポートに毎週眼を通しながら(隔週で再履修生のレポートも加わる)、それらに散見する文体の不統一現象、すなわち異なる種類の文体の混用が気になった。具体的には「丁寧体」(「です・ます体」と、常体(「である体」や「だ体」との混用である。

「レポート・論文など学術的な文章の文体は『である』体を使用すべきである」との認識、及び「論文ほど学術的ではないレポートでは『です・ます体』の使用も許容されないわけではないが、文書全体を通じて使用文体は統一すべきである」との認識を筆者は持ち、学生も国語関係の授業などを通じて同様の認識を得ていることを期待していた。よって、文体混用の見られるレポートには、「文体を統一しよう」という意味のコメントを付して返却するようにしていた。しかし、丁寧体と常体を混用しているレポートは、一定数存在し続けていた。

そしてこの文体混用現象には、ある傾向が見出される。

本稿は、文章作成上「このように書くべき」という指導方針や指導項目を提言するものではなく、「仏教」レポートにおける文体混用現象の様相を記すとともに、文体選択に関わる問題について考えてみようとするものである。

## 1. 学術的な文章における文体についての既存の認識

まず、学術的な文章で使用する文体に関して、どのようなことが共通認識とされているかを確認しておこう。

### 1-1 論文やレポートで使用すべき文体とは

先述のように、筆者は「大学のレポートや小論文、論文など、学術的な文章を作成する際の文体は『である体』を用いるのが適切である」という認識を持っていた。大学など高等教育機関での教育に携わる者においてはこの認識は共有されているものと思う。が、そもそもなぜ学術的な文章の文体に「である体」が望ましいとされるのか。

日本の高等教育機関で学ぶ生徒を対象とする、論文やレポートなどの学術的文章作成の指導書・教材においては、使用文体に関して、丁寧体(「です・ます体」)ではなく常体(「である体」

や「だ体」<sup>1)</sup>を用いるべきことが記されている。しかし、その理由については、すべての指導書・教材に説明があるわけではない。以下に、理由についても記述のある指導書・教材から引用する。「/」は、原文では改行されていたこと表す。

- (1) 日本語を初めて習うときにはふつう、丁寧な話し言葉から習う。(略)それは「です・ます体」と呼ばれる。作文を書くときにも、まず、この「です・ます体」で書いていく。この文体は、相手に話しかけるような気持ちで書く文章に適している。したがって、手紙には「です・ます体」が多く使われる。/しかし、大学で書くレポートや論文は自分の気持ちを書くものではなく、事実や意見を客観的に述べるものである。レポートや論文には「です・ます体」ではなく、「である体」と呼ばれる文体が使われる。

(二通信子・佐藤不二子 2000『留学生のための論理的な文章の書き方』)

- (2) 論文は、不特定多数の読み手を想定している、書き手が誰であってもその価値を変えない文章です。そのため、書き手が誰であるか、読み手が誰であるかということで文末の文体が変わることはありません。/論文が中立体である「である体」で書かれるのもその一つの表れです。書き手が学生で読み手が先生だからといって、丁寧体である「です・ます体」にする必要はありませんし、反対に書き手が先生で読み手が学生だからといって、タメ語である「だ体」にする必要もありません。

(石黒 圭 2012『論文・レポートの基本』)

- (3) 論文の文章は、手紙などと違って特定の人を読むことを前提としていないため、「です・ます」を使わずに書くのが普通である。

(浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 1997『大学生と留学生のための論文ワークブック』)

文書の種類による文体の選択の際に考慮する要素として、文書の内容もさることながら、その文書が特定の人を読み手に想定しているか、そうではないのかという要素も大きいことがわかる。

## 1-2 文体統一の要、文体混用の可否について

「学術的な文章においては文体を統一し、文体の混用は避けるべきである」ということを、明記している指導書・教材もあるが(銅直・坂東 2013 など<sup>2)</sup>)、していないものも多い。明記しないのは、それは自明のことで殊更に述べる必要もないとの考えに基づくのであろうか。明記しているものの中にも、統一すべき理由について明確な説明を記すものは、管見では見当たらない<sup>3)</sup>。レポートや論文に相応しい文体が常体であるとなれば、文書全体を通してそれを用いるのは当然、ということであろうか。

そのような中で、石黒(2005)は文章作成の指導書としては珍しく、文体混用を一つの表現技法と捉え、全 12 講のうちの 1 講を割いてその意義や効用について追究している。これについては後で取り上げる。

## 2. 仏教レポートの分析

平成 25 年度冬学期「仏教Ⅱ」において作成された学生のレポートのべ 113 人分(第 14 回目

のレポート 55 人分+第 15 回目のレポート 58 人分。両回を通じてほぼ同じ学生<sup>4)</sup>が作成)の使用文体について示し、文体混用現象における特徴的な様相について述べる。

改めて「仏教Ⅱ」のレポートについて記しておく、同授業においてはほぼ毎回、あるテーマに基づく講話が行われる。受講生はその講話の内容のまとめ、及び、講話を聴いての感想を記した 400 字程度のレポートを授業時間内に作成し、提出することになっている。

## 2-1 使用文体による分類とその数

第 14 回目 (2014 年 1 月 9 日実施) の 55 人分のレポート、および第 15 回目 (2014 年 1 月 16 日実施) の 58 人分のレポート、合計 113 レポートの使用文体による分類と、各区分に相当するレポートの数を示す。

文体の分類について説明しておく。文末が「です・ます」体でない文の場合、名詞述語文と形容動詞述語文、ある種の助動詞(「ようだ」「べきだ」等)を述語に持つ文に関しては、文末の形から「だ体」と「である体」の区別が可能である。しかし、分析対象としたレポートには、それらの文を含まず、したがって「だ体」と「である体」のどちらとも決められないものも少なくなかった<sup>5)</sup>。また、名詞述語文ではあるがコピュラ(繫辞)を欠く文や、「修飾節+[名詞]。」という形の文(この後で示す文章例中で「~[名詞]。」と表示する)もいくつか見られたが、これらは形状からは「だ体」・「である体」のどちらにも相当しないことになる。今回は煩雑さを避けて、「です・ます体」ではない文については、一括して「常体」とした<sup>6)</sup>。

文体混用の見られる文章に関しては、「です・ます体」の文と常体の文の数を数え、「○○体」の文をより多く含む「△△体」の文をより少なく含むレポートであれば、「○○体が基調で、部分的に△△体が使用されている」と見なし、〈○○体ベース+△△体〉と表現した。

(4) [表 1] 113 レポートの使用文体による分類とその数

使用文体	第 14 回目	第 15 回目	合計数 (% <sup>7)</sup> )
すべての文が「です・ます体」	8	6	14 (12.4%)
すべての文が常体	37	40	77 (68.1%)
常体ベース+「です・ます体」	7	9	16 (14.2%)
「です・ます体」ベース+常体	2	1	3 (2.7%)
「です・ます体」と常体が同数	1	2	3 (2.7%)
合計	55	58	113

最も多いのは常体で統一されているレポートで、全体の 7 割近くを占めるが、〈常体ベース+「です・ます体」〉のレポートもそれなりの数があることがわかる。

## 2-2 〈常体ベース+「です・ます体」〉の文章例

ここに〈常体ベース+「です・ます体」〉のレポートの文章例 16 篇を示す。ただし、原文そ

のままを示すことは避け、各文の文末部分を中心に、文の骨格を示す形にしてある。「/」は、原レポートでは改行されていたことを示す。後で言及する便宜上、それぞれの文章例中の各文の文頭に丸数字を付した。

第 15 回目のレポートには「学園訓について」「終講にあたって」「感想」などの見出しが記されたものもあるが、それらの見出しは文にはカウントしていない。

文章例中の「です・ます体」の文には下線を施した。

#### ●第 14 回目の〈常体ベース+「です・ます体」〉のレポートの文章 7 例

この回の講話テーマは「学園訓について」（「和」の精神）であった。

- (5) ①～とは～。②～は～ということがわかった。③～ではないかと思いました。
- (6) ①～ていた。②～ていた。③そして～は～を表している。/④～は～から来ている。  
/⑤～だと思いました。
- (7) ①～がある。②～もある。/③～できる。/④～がある。/⑤～がある。/⑥～から、今日の講話を聴けてよかったです。
- (8) ①～がある。②～のだと分かりました。/③～とは、～[名詞]。/④～[名詞]。⑤～とは、～から来ている。⑥～は～～ことができる。
- (9) ①～が～いましたが～と～に変わりました。②流石～だなと思いました。/③～がいる。④～が上手い。/⑤～ことが～になる。
- (10) ①～[名詞]。②～と思う。③～と思う。/④～ますね。⑤～たかったです。
- (11) ①～は、～である。/②～においては、～とされています。③～には、～が込められている。/④～として、～も大切である。⑤それは～てくる。/⑥～ので、～して、～したい。

#### ●第 15 回目の〈常体ベース+「です・ます体」〉のレポートの文章 9 例

この回の講話テーマは「学園訓について」（前回の続き）及び「終講にあたって」であった。

- (12) 「学園訓について」/①～もできる。②～が大切である。/③～は～である。④しかし、～というわけではなく、～が本当に大切なのである。/「終講にあたって」/⑤～とは～である。⑥～はずである。⑦同時に、～はずである。⑧～なければならないと思いました。
- (13) 学園訓について/①～表している。②～とは～てできていて～という意味がある。③～は～て出来ている。④～という意味がある。/⑤～と考えている。/⑥～だろうなと感じた。⑦～特に大事だと思ったのは、～である。⑧～ば～てしまう。⑨～が大事だなと思いました。
- (14) 学園訓について/①～は～である。②～という意味である。③～は～である。④～と読む。/終講に当たって/⑤～結果、～を得た。⑥～は、～ではない。⑦～ではなく、～ていくのである。/感想/⑧私は、～と知りました。⑨～については、～ことから、～ではないと考えました。

- (15) ①～は、～[名詞]。②しかし～でも、～にもある。③～こと、それが～である。／④また、～のは、～ではないか。⑤～は、～なのである。／⑥～というものは、私自身、～つもりではいきました。⑦しかし、～と、正直なところ～のだと思います。⑧そんな中で今回、～について知り、～について考えました。⑨～ようにしようと思います。
- (16) ①～とは～である。②～は～があり、～は～があり、～は～ことで、～は～[名詞]。③～は～という。④～とは～という意味があり、～から出来た。／⑤僕も～と思う時があります。⑥けれど、～ということも知っています。⑦なので、これからも～～と思いました。
- (17) ①～とは～ことである。②～は～と書く。③～とは～を意味している。④～とは、～する。⑤そして～が～になって～と～する。⑥このように～ことを意味している。／終講にあたって。／⑦～して、～に対してとても無関心でした。⑧ただ～ことで～に興味を持つことができました。⑨これからも、～していきたいです。
- (18) ①～とは～[名詞]。②～で～[名詞]。／③そして、～は～ことであり。④～ことが大切である。／⑤～て感じたことは、～ということです。⑥～においても～は～であるし、そのためには、～必要もある。⑦～ので、～していきたいです。
- (19) ①～という言葉が、すごく心に響きました。②～と感じた。③～こと、～こと。④～なければならぬ。⑤～のだろう。⑥～にも、全て意味があるのだ。
- (20) 学園訓について／①～がある。／終講にあたって／②～は～ている。③例えば、～がそうだなと思いました。／④～もある。⑤それは、～～となると考えました。

### 2-3 〈常体ベース+「です・ます体」〉のレポートの分析

上記の16篇のレポートには、「です・ます体」の文が合計28文含まれている。それらの文の述語部分を中心に着目して整理すると、数の多いものから次のようになる。

- (21) a. 「～と思います」・「～と思いました」 …9文 ((5)③、(6)⑤、(9)②、(12)⑧、(13)⑨、(15)⑦、(15)⑨、(16)⑦、(20)③)
- b. 「～たいです」・「～たかったです」 …3文 ((10)⑤、(17)⑨、(18)⑦)
- c. 「～と考えました」 …2文 ((14)⑨、(20)⑤)

以下は各1文ずつである<sup>8)</sup>。

- d. 「～と思う時があります」((16)⑤)、「(感じたのは)～ということです」((18)⑤)、「～と分かりました」((8)②)、「～聴けてよかったです」((7)⑥)、「心に響きました」((19)①)、「～と知っています」((16)⑥)、「～と知りました」((14)⑧)、「～興味を持つことができました」((17)⑧)、「～について考えました」((15)⑧)、「～つもりではいきました」((15)⑥)、「無関心でした」((17)⑦)
- e. 「～とされています」((11)②)、「変わりました」((9)①)

目立って多いのがa.の「～と思う」類を述語部分に持つ文であり、それよりはずっと少ないがb.は書き手の願望を述べる文、c.は書き手の思考内容を述べる文である。d.に挙げた各文は、述語部分の形は様々だが、書き手の感情や内面、思考について述べる文や意見を表明する文で

あるという点で、a.～c.と共通の特性が見出せる。

それに対して、常体で書かれている文は、講話に登場した言葉や概念の説明、事実や出来事を述べる文である。

もともと、「思う」「考える」の類を述語に持ち、書き手の感情や思考を述べる文であっても「です・ます体」で表されていないものもあるし(例えば(10)②③、(13)⑤)、(21)e.のように、事実や出来事を述べる文で「です・ます体」で表されているものもある。しかし、文体混用の見られるレポートにおいては、上記のような文内容と文体との相関があることは否定できないと言えるだろう。

上で文内容と文体の相関と言ったが、そもそもレポートの構成要素と文内容にも相関がある。

先述のように、この「仏教Ⅱ」のレポートは、講話の内容のまとめ、及び講話を聴いての感想を記すものであるが、講話の内容まとめの部分では、講話に登場した言葉や概念の説明や、事実や出来事の叙述が行われ、感想の部分では、書き手の感情や内面や思考を述べること、意見の表明が行われる。

次の(22)～(25)は別の回のレポートのうち〈常体ベース+「です・ます体」〉のものの文章例である。これらのレポートが作成された回の講話テーマは「喫煙の害」で、レポートの頭の部分では講話で説明された喫煙の害の様相が記されていた。それが(22)の①②④⑤⑥、および(23)～(25)の番号のみ記した文((23)①～③、(24)①～⑥、(25)①～⑧)であるが、これらは常体である。その後、感想が書かれているが、その文のほとんどは「です・ます体」で書かれている。

文は、やはり書き手の感情や内面、思考内容を述べる文がほとんどを占めている。

- (22) たばこの害。①～から引き起こされる害。②～している。③～は(未完成の文)／④～ので体に悪い。／⑤～があり、～がある。／⑥また～そうだ。／⑦～ことは初めて知りました。⑧～かな、と思いました。⑨～しようと思います。
- (23) ①～③：常体／④～と予想しますが、～のかなと感じます。⑤～は～なのです。⑥～事です。⑦～べき。
- (24) ①～⑥：常体／感想／⑦～と、今回の講義でわかりました。⑧～と思います。
- (25) ①～⑧：常体 ⑨～～と思う。⑩～～と思いました。

#### 2-4 〈常体ベース+「です・ます体」〉のレポートの作成者の意識について

〈常体ベース+「です・ます体」〉を作成した学生のうち5名の者に、質問紙または対面にて質問を行った。質問内容は、「あなたの『仏教Ⅱ』のレポートの文は、主に常体(「である体」や「だ体」)で書かれているが、部分的に『です・ます体』の文も見られる。それらの文を『です・ます体』にした理由が何かあるか」というものである。

5名のうち2名は「無意識であった」「無意識に書いた」と回答したが、他の3名(学生ア・イ・ウとする)は次のような回答を寄せた。

- (26) 【学生アの回答の概要】きちんと意識していることではないが、(講師の)先生のお話しになったことをそのまま、あるいはまとめて書く場合は「である体」や「だ体」を、お

話を聞いて自分自身が思ったことや感じたことを書く場合は「です・ます体」で書いているのだと思う。何故、自分の思ったことを「です・ます体」で書くのかは自分にもわからない。

(27) 【学生イの回答の概要】「まとめ」は話の要点を書くものだから、常体でよいと考えている。「感想」は、自分の意見を伝える部分だから、「です・ます体」で書くようにしている。

(28) 【学生ウの回答の原文ママ】「僕の『です・ます体』には、一応理由があります。僕は『だ・である体』は主に人から聞いた何かを説明するときに使用しています。逆に『です・ます体』は主に、自分の思ったことや、気持ちなどを表現する時に使用しています。そういう理由から僕は『です・ます体』を部分的に文にいれています。」

上記の回答から、学生ア・イ・ウはともに「(講話として) 聴いた話の説明やまとめの文には常体を用い、自分の思ったことや感じたこと・気持ちを述べる文、意見を伝える文には『です・ます体』を用いる」という認識のもとに、文体の使い分けを行っていることがわかる。

## 2-5 その他の文体混用の見られるレポート

ここには、「「です・ます体」ベース+常体」のレポート、及び「「です・ます体」と常体が同数のレポートの文章例を示す。

### ●第14回目の「「です・ます体」ベース+常体」のレポートの文章2例

(29) ①～と思いました。／②～と思うし、～と思っていました。／③でも、～と感じた。

(30) ①～[引用者注釈：講話テーマ]を聞いた。②～は～ています。③けれど、～ていません。④～が～てくれました。⑤その～はとっても美しかったです。⑥そして～、けれど、～て驚きました。⑦～と感じました。

### ●第15回目の「「です・ます体」ベース+常体」のレポートの文章1例

(31) ①～は～言葉。②～、面白そうですね。③～しそうですね。④～か気になります。

### ●第14回目の「「です・ます体」と常体が同数のレポートの文章1例

(32) ①～とは、～である。／②書くことがなかったです。

### ●第15回目の「「です・ます体」と常体が同数のレポートの文章1例<sup>9)</sup>

(33) ①～は～ようになった。／②～は～です。／③～は～を表していて～は～を意味しています。／④～というのは～ではなく～してしまう。

(31)は言葉の説明が常体の文で書かれ、書き手の感情や内面を述べる文が「です・ます体」で書かれている。(29)には講話内容のまとめ部分がなく全ての文が感想を述べる文であり、(33)は全ての文が講話内容のまとめに相当する、事実や出来事を述べたり、概念を説明したりする文で、感想を述べる部分がないが、どちらも「です・ます体」と常体が入り混じっている。(29)(33)及び(30)のレポートにおいては、「常体ベース+「です・ます体」」のレポートほどには、文内容と文体の相関関係は見られない。

(32)は①が概念説明の文で常体を取っている。②が「です・ます体」の文で、レポートが極端に短くしか書けなかったことについての弁解であるが、これは明らかに、レポートを読む教員に向けられたものである。「です・ます体」と常体とが混在するレポートにおいて「です・ます体」で書かれる文には、2-3で述べた書き手の感情や内面を述べる文、意見表明の文の他に、特定の相手を念頭に置いて、その相手に向けて書かれた文もある。(32)②の他には、これはレポートの内容（講話内容のまとめや講話の感想）とは直接関係ないものとしてカウントしなかったが、教員に対しての年頭の挨拶（年明け後の初めてのレポートである第14回目のレポートに見られた）や、自分が観て感動した映画の勧め（原稿用紙欄外に記されていた）といった、レポートを添削する教員に宛てたメッセージもあった。また、「です・ます体」と常体が同数のレポートのうち的一篇は、講話テーマに触発されたと思われる問いかけを「～でしょうか。」と「です・ます体」で記した文を複数含んでいた（教員に向けての問いかけとも、書き手の想定する特定の人に向けての問いかけとも解釈し得るものであった）。

### 3. 「仏教」レポートにおける文体混用現象のまとめ

第14回・15回の「仏教」レポートに見られた文体混用現象をまとめると次のようになる。

(34) [表2] 第14回・15回の「仏教」レポートにおける文体混用の様相

レポートの構成部分	文の内容	使用される文体
A 講話内容のまとめ	言葉や概念の説明、事実や出来事を述べる文	常体が多く使用される傾向がある
B 講話を聴いての感想	書き手の感情や内面、思考を述べる文や意見を表明する文	「です・ます体」が多く使用される傾向がある
C その他（特定の相手に向けてのメッセージ）	問いかけ、弁解、挨拶、勧めなど	「です・ます体」が使用される

「仏教」レポートは、その内容が、事実を客観的に述べるだけではなく、感想を述べる部分をも含み、また目を通す教員に向けてのメッセージの記載も可能であるなど、学術的なレポートの典型とはやや性質が異なる。学生が作成したレポートのうち、常体に徹しないレポートにおいては、その「やや性質が異なる」部分に「です・ます体」が用いられる傾向があり、レポート全体として文体混用が見られることになるわけであるが、それが不適切だとは一概に言うことはできないと筆者は考える。

表2でCとした部分は、これは「仏教」レポートの本来の要件ではなくあくまで「これを入れることも可能である（許容される）」というものであるが、触れておく。教員に向けてのメッセージを伝えるための文であれば、それが「です・ます体」で書かれることはむしろ適切なことである。(1)(2)(3)でも紹介したように、ふつう「論文やレポートは特定の読み手を想定しない文章なので、『です・ます体』を用いない」と認識されているのであるが、「仏教」レポート

のCの部分に関しては、この認識は該当しないということである。

Bの「講話を聴いての感想」を述べる部分、書き手の感情や内面、思考を述べる文や意見を表明する文に「です・ます体」が多く使用される傾向があることについてはどのように考えればよいであろうか。

1-2でも触れたが、文章作成の指導書・教材の類の中では珍しく、文体混用の意義や効果を積極的に追究しその記述に多くを割いている文献として石黒(2005)がある。同書には「丁寧形と普通形の混用のポイント」として、概略次のような記述がある(pp. 100-101)。石黒(2005)は、本稿で言う「です・ます体」・「常体」を、それぞれ「丁寧形」・「普通形」と呼んでいる。

- (35) i) 丁寧形と普通形の混用は可能であり、その混用の方法にはルールがある。
- ii) 会話文では、登場人物相互の人間関係がわかり、登場人物の同定に役立つ。
- iii) 地の文において、読み手である「あなた」、書き手である「私」を強く意識すれば丁寧形になりやすい。とくに疑問や依頼などの形によって読者に働きかける文は丁寧形になりやすい。
- iv) 地の文において、事実を表す文であれば普通形に、判断や説明を表す文であれば丁寧形になりやすい。これによって、読み手に事実を客観的に紹介できる一方、主張を柔らかく提示したり、難しい事柄をやさしく伝えたりすることができる。
- v) 地の文において、文脈依存性が高い文は普通形になりやすい。一方、段落の終わりに位置する文など、独立性の高い文は丁寧形になりやすい。

上記のii)とv)は今回本稿で扱った現象と直接の関係はないので措く。iii)の中の「読み手を強く意識すれば丁寧形になりやすい」というポイントは、先ほど触れたCにおける「です・ます体」使用と関わるだろう。iv)は文内容と文体との関わりの問題で、「事実を表す文は普通形になりやすい」というポイントはAに見られる傾向と合致する。「判断や説明を表す文であれば丁寧形になりやすい」ともあり、「説明」という語を「言葉や概念の説明(を述べる文)」のように用い、そのような文は常体をとる傾向があると指摘する本稿とは齟齬を来すかのように見えるが、石黒(2005)が「説明を表す文」として示す例文は、書き手が自分の決意の理由や自分の行為の持つ意味を「～のです」・「～からです」といった形式で説明している文であり、本稿で挙げた、講話に登場した言葉や概念の説明を行う文とは異なる。石黒(2005)が挙げる「説明」は、読み手を強く意識して読み手に向けて行うもので、iii)のポイントに通底する性格も持つと思われる。

石黒(2005)でも紹介されている野田(1998)は、文章構造と文体についての研究であるが、ここにすでに文内容と文体との相関についての指摘がある。野田は「中立調」(特定の聞き手がない書きことばに使われる、丁寧さ非考慮で、中立形(非デスマス形)基調の文体)の文章・談話は、事実だけを述べる事実文をベースに構成されているが、その中に「主張文」(事態に対する判断や説明を聞き手に主張する文)が含まれる場合、その文の文末は丁寧形になりやすいことを述べている。

また、石黒(2005)には、文体使い分けに関して学生が寄せたという、次のような興味深いコメントが紹介されている(p. 89)。

(36) 自分の意見・感想・説明(例・問題提起を含む)は丁寧体。考察や事実を述べるまとめは普通体が使われると考えた。理由としては、①「事実やまとめは、説得力が必要。だから普通体を使う」、②「意見・感想・説明では聞き手に理解してもらおうとする為、丁寧体を使う」と考えたからである。

文に書く内容と使用文体との関係についてのこのような認識は、(26)～(28)に示した3名の学生の認識とも一致する。

「仏教」レポートの講話内容のまとめ部分は、講話で示された事柄を記すもので、これは読み手である教員も聴講して既知の内容である。しかし、感想部分で示される、書き手の感情や内面、思考内容や意見に関しては、表明する以上、読み手によりよく理解してほしいと書き手は考えるであろう。その意思が、相手を意識しての発話や記述に用いる「です・ます体」(丁寧体)の使用という形で現れることは自然なことではないかと思われる。

このほか、誠実で真面目な態度、真摯な姿勢を表すには「です・ます体」というスタイルがふさわしい、という認識が関与しているということもあるかもしれない。一見かけ離れた現象のようだが、「役割語」が関わる、ある興味深い現象がある。スポーツ報道における「役割語」を扱った太田(2011)は、オリンピック大会参加選手で、社会事情や身体面等で恵まれない立場にある選手を取り上げて報道する際の選手インタビューの翻訳が「です・ます体」で訳されることが多いと指摘し、そのような選手の“思い”“訴え”に「です・ます体」が使われるのは、困難に向き合い懸命に努力してきた様子を視聴者に想像させることができるからだろうと述べている。「役割語」とは共同体(この場合日本社会)に共有されているからこそ有効に機能するものである。とすれば、「です・ます体」という文体が、懸命な様子、真摯な姿勢、誠実な態度といったものを表すのにふさわしいという認識は一般的に共有されていると言えるだろう。

レポート作成者である学生もまた「自分の内面、思考や意見を読む者に理解してもらおうべく表明する際には、誠実、真摯に表明するべきであり、それには『です・ます体』がふさわしい」という認識を持ち、それを意識的に用いた、あるいはそれが無意識的に反映された、ということもあり得るのではないかと筆者は考える。

「文書全体を通じて文体は統一すべきである」という規範意識を強く持つ書き手は、全体を常体で統一してレポートを作成するであろうが、上に述べたように、感想を述べる部分には「です・ます体」を使用するレポートも、「仏教」レポートの特性上、「間違っている・不適切なレポート」と見なす必要はないというのが、「仏教」レポートを分析して筆者が得た見解である。

#### 【注】

- 1) 常体を用いるべきという記述にとどまる指導書・教材と、常体の中でも「だ体」ではなく「である体」を用いるべきと述べる指導書・教材がある。
- 2) 例えば銅直・坂東(2013)に次のような記述がある。「常体(だ・である体)とは、レポートなどの文書に使用する文体で、敬体(です・ます体)とはスピーチや手紙などに使用する文体です。引用や会話文の挿入などは例外ですが、同一文書内では、文体を統一しましょう。」(p.12)
- 3) 小松・松延(2013)は、学術的な文章ではなく就職試験の小論文・作文の書き方の指導書であるが、文体

が不統一の作文・小論文は、作成者に低い評価が与えられるとして注意を促している。次は同書の一節である。

「作文・小論文で、まずチェックされるのが文体の不統一です。

1 「である体」と「です・ます体」の混同。／態度のあやふやな人物、言語感覚のにぶい人物、文章の読み返しのできない人物、などの評価を受けます。」(p.93)

これによれば、言語感覚が鋭い人は「である体」と「です・ます体」の混同(混用ではなく混同とある)などしないし、それは作文・小論文を読み返し推敲する過程において、直すべき不備であるということになる。

- 4) 本学の2セメスターの2つのクラスに所属する学生に、若干の再履修学生が加わったもの。14回目と15回目では、出席状況により少しの異同が生じたが、ほとんどが同じ学生である。
- 5) 名詞述語文や形容動詞述語文を述語に持つ文に関しては、「だ体」よりも「である体」の方が多く用いられていた。
- 6) 名詞述語文でありながらコンピュータを欠く文や、「修飾節+[名詞]。」という形を取る文は、本来、文体的には「である体」よりもくだけたものとして区別するべきであると思われるが、今回の分類では「です・ます体」ではない文体として常体を含めた。
- 7) 小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は100%にはならない。
- 8) (10)④に関しては、「ますね」の前の品詞を筆者が記録していなかったため、(21)a.～e.のいずれとも分類することができなかった。
- 9) (4)の表1に示したように、「です・ます体」の文と常体の文が同数のレポートはもう1例存在するが、デリケートな内容であると判断して、文章を例示することは差し控える。そのレポートに見られる、文体選択と関わりのある特徴については、2-5の後ろの方で触れる。

#### 【参考文献】

- 石黒 圭(2005)『よくわかる文章表現の技術Ⅲ 文法編』明治書院
- 石黒 圭 編(2007)『日本語てにをはルール』すばる舎
- 石黒 圭(2012)『論文・レポートの基本』日本実業出版社
- 太田眞希恵(2011)「ウサイン・ボルトの“I”は、なぜ『オレ』と訳されるのかースポーツ放送の『役割語』ー」金水 敏 編『役割語研究の展開』くろしお出版
- 金水 敏(2008)「役割語と日本語史」金水 敏・乾 善彦・渋谷勝己『シリーズ日本語史4 日本語史のインタフェース』岩波書店
- 小松五郎・松延康(2013)『就職試験の小論文・作文 '15年版』成美堂出版
- 小宮千鶴子(2005)「文体」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店
- 世界思想社編集部 編(2011)『大学生 学びのハンドブック 改訂版』世界思想社
- 銅直信子・坂東実子(2013)『大学生のための文章表現&口頭発表練習帳』国書刊行会
- 友松悦子(2008)『小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク
- 二通信子・佐藤不二子(2000)『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子(2009)『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会
- 野田春美(2012)「エッセイ末における読み手を意識した表現」『神戸学院大学 人文学部紀要』第32号 神戸学院大学
- 野田尚史(1998)『『ていねいさ』から見た文章・談話の構造』『国語学』194集 武蔵野書院

高橋 美奈子

浜田麻里・平尾得子・由井紀久子(1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版  
メイナード・K・泉子(1991)「文体の意味 ―ダ体とデスマス体の混用について―」『月刊言語』20-2 大  
修館書店